

成島信遍年譜稿（二十一）

久保田 啓 一

【キーワード】成島信遍、御書物方日記、冷泉為村、延享三年、関東下向

はじめに

『広島大学大学院文学研究科論集』第七九卷（二〇一九年十二月二五日発行）に拙稿「成島信遍年譜稿（十九）」を発表した後、これからの進捗の度合いを考慮すると、一つの雑誌に年一度掲載するのではとても完結に至らないと判断せざるを得ず、広島近世文学研究会発行の研究誌『鯉城往来』と合わせ、両誌を交互に発表の媒体とすることとした。

なお、今号より『広島大学文学部論集』と誌名が改まることもあり、これまで書き継いだ「成島信遍年譜稿」の題目、掲載誌、巻号、発行所、発行年月日を一覧としてまとめておく。今後、必要あつてこれらに言及する場合は、「拙稿①」の「ごとく」記す。

① 「成島信遍年譜稿（二）」、『江戸時代文学誌』第六号、柳門舎、

一九八九年三月一五日

② 「成島信遍年譜稿（二）」、『江戸時代文学誌』第七号、柳門舎、一九九〇年二月一五日

③ 「成島信遍年譜稿（三）」、『江戸時代文学誌』第八号、柳門舎、一九九一年二月二五日

④ 「成島信遍年譜稿（四）」、『日本文学研究』第三〇号、梅光女学院大学日本文学会、一九九五年一月二〇日

⑤ 「成島信遍年譜稿（五）」、『日本文学研究』第三一号、梅光女学院大学日本文学会、一九九六年一月二〇日

⑥ 「成島信遍年譜稿（六）」——享保十四年（二十年）——、『広島大学文学部紀要』第五六卷特輯号一、広島大学文学部、一九九六年二月二〇日

⑦ 「成島信遍年譜稿（七）」、『広島大学大学院文学研究科論集』第六四卷、広島大学大学院文学研究科、二〇〇四年十二月二五日

- ⑧ 「成島信遍年譜稿(八)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第六五卷、広島大学大学院文学研究科、二〇〇五年二月二五日
- ⑨ 「成島信遍年譜稿(九)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第六七卷、広島大学大学院文学研究科、二〇〇七年二月二五日
- ⑩ 「成島信遍年譜稿(十)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第六八卷、広島大学大学院文学研究科、二〇〇八年二月二五日
- ⑪ 「成島信遍年譜稿(十一)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第六九卷、広島大学大学院文学研究科、二〇〇九年二月二五日
- ⑫ 「成島信遍年譜稿(十二)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第七〇卷、広島大学大学院文学研究科、二〇一〇年二月二五日
- ⑬ 「成島信遍年譜稿(十三)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第七二卷、広島大学大学院文学研究科、二〇一二年二月二五日
- ⑭ 「成島信遍年譜稿(十四)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第七三卷、広島大学大学院文学研究科、二〇一三年二月二五日
- ⑮ 「成島信遍年譜稿(十五)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第七五卷、広島大学大学院文学研究科、二〇一五年二月二五日
- ⑯ 「成島信遍年譜稿(十六)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第七六卷、広島大学大学院文学研究科、二〇一六年二月二五日
- ⑰ 「成島信遍年譜稿(十七)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第七七卷、広島大学大学院文学研究科、二〇一七年二月二五日
- ⑱ 「成島信遍年譜稿(十八)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第七八卷、広島大学大学院文学研究科、二〇一八年二月二五日
- ⑲ 「成島信遍年譜稿(十九)」、『広島大学大学院文学研究科論集』第七九卷、広島大学大学院文学研究科、二〇一九年二月二五日
- ⑳ 「成島信遍年譜稿(二十)」、『鯉城往来』第二二号、広島近世文学研究会、二〇二〇年一月三〇日
- また、信遍に関する以下の別稿の参照を願う場合は、頭記の符号とともに言及することとしたい。
- ア 「九州大学萩野文庫蔵『成島信遍集』―翻刻と解題―」、『文献探究』第一三三号、文献探究の会、一九八三年二月二五日
- イ 「三つの『三世のなみ』―成島信遍家集の成立―」、『文献探究』第一五号、文献探究の会、一九八五年二月二五日
- ウ 「江戸冷泉門と成島信遍」、『近世文芸』第四四号、日本近世文学会、一九八六年六月一〇日(拙著『近世冷泉派歌壇の研究』(翰林書房、二〇〇三年二月二八日)に収録)
- エ 「川越市立図書館蔵『芙蓉楼玉屑』(上)―翻刻と解題―」、『日本文学研究』第二六号、梅光女学院大学日本文学会、一九九〇年十一月一日
- オ 「川越市立図書館蔵『芙蓉楼玉屑』(中)―翻刻と解題―」、『日本文学研究』第二七号、梅光女学院大学日本文学会、一九九一年十一月一日
- カ 「川崎池上家『京進書札留』抜書―冷泉門人池上幸豊の四十年

- 一、「近世文芸」第五六号、日本近世文学会、一九九二年七月一〇日（『近世冷泉派歌壇の研究』に収録）
- キ「川越市立図書館蔵『芙蓉楼玉屑』（下）―翻刻と解題―」、『日本文学研究』第二八号、梅光女学院大学日本文学会、一九九二年一月一日
- ク「川越市立図書館蔵『芙蓉楼玉屑』（続）―解題―」、『日本文学研究』第二九号、梅光女学院大学日本文学会、一九九三年一月一日
- ケ「成島信遍の対俳壇教訓」、『雅俗』第五号、雅俗の会、一九九八年一月一〇日
- コ「近世冷泉派歌人としての池上幸豊」、『大江戸マルチ人物伝 池上太郎左衛門幸豊』、川崎市市民ミュージアム、二〇〇〇年二月二六日（『近世冷泉派歌壇の研究』に一部収録）
- サ「成島家歴代の立場―乾照夫氏「幕末期の成島柳北」に寄せて―」、『鯉城往来』第三号、広島近世文学研究会、二〇〇〇年一月三一日
- シ「幕臣成島信遍と江戸文壇」、『国文学解釈と鑑賞』第七四卷三号、至文堂、二〇〇九年三月一日

以下、続稿を掲載するに当っては、直前の「年譜稿」に記載した年譜事項のみを挙げ、せめてもの便宜としたい。今回は拙稿⑳が該当する。

- 「成島信遍年譜稿（二十）」の事項
- 延享二年 乙丑 一七四五 五十七歳
- （承前）
- 九月二十七日、本丸で深見新兵衛と対談、御小納戸にあった書物の扱いにつき協議する。また、九月二十三日に借用した長持と箱釣台を書物方に返却する。（『幕府書物方日記』十八）
- 九月二十九日、書物について、西丸で深見新兵衛と対談する。（『幕府書物方日記』十八）
- 秋、田沼意行の『意行詠草』（慶応義塾図書館蔵）を編む。
- 十月二十三日、御小納戸より返却された書籍の目録につき、深見新兵衛と対談する。（『幕府書物方日記』十八）
- 十一月十四日、小田切治大夫より「孔叢子」を預かる。（『幕府書物方日記』十八）
- △ 十一月、『南郭先生文集』三編刊行。「贈鳴帰徳序」（巻五）と「報田兼山」（巻十）に信遍に関する記事あり。
- 十二月六日、「五常解」（『芙蓉楼玉屑』所収）を著す。
- 閏十二月朔日、「東方農準解」を著す。
- 閏十二月十日、巨勢伊豆守よりの書物返却を取り次ぐ。（『幕府書物方日記』十八）

○ この年、五女功、池上幸政の養女となるか。（『全集』巻十所収「梅崎みたまの記」）

次から「成島信遍年譜稿（二十一）」の記述となる。

延享三年 丙寅 一七四六 五十八歳

○ 正月二十一日、「鄂曲」一巻を差上げるよつにとの巨勢伊豆守からの指示に関し、事情説明の手紙を川口頼母に出す。（御書物方日記）第三十冊）

国立公文書館内閣文庫蔵「〔御書物方〕日記」の翻刻は、東京大学史料編纂所編『大日本近世史料 幕府書物方日記』十八（東京大学出版会、一九八八年）を最後に刊行が途絶している。よつて延享三年以降の記事は、原本か公開された画像を見て解説するしかない。以下、画像に基づいて適宜本文を翻字して掲げることとする。典拠として掲げる資料名は「御書物方日記」とし、当該の冊数を添える。延享三年正月から六月までは第三十冊、七月から十二月までは第三十一冊となる。

正月二十一日に次の記事がある。漢字は通行の字体に改め、「二」「ハ」「ミ」「江」などは平仮名とし、適宜句読点・濁点などを補う。

肥前守殿より御用有之由申来、罷出候処、土岐佐兵衛佐え致対談候様被仰渡、佐兵衛佐被申聞候は、楽書之類之内、朗詠などに鈔をさし候御書物有之候様に被覚候、吟味いたし、今日にても明日にても差出候様に被仰渡候。依之罷帰候処、即刻伊豆守殿より、御引移之時分御預ケ成候鄂曲一巻、只今差上候様に申来、此節成島道筑より手紙相添、先刻佐兵衛佐被申聞候、抄をさし候楽書之義、右鄂曲にて相済候由、申来候。右御書物即刻持参、伊豆守え差出之。

十二番 寅八月二日下ル

「鄂曲」 一巻 篋入

添書一通附

花色純子、糸萌黄

「肥前守」は、西丸に勤める御側衆の松平肥前守忠根。「土岐佐兵衛佐」は、やはり西丸の吉宗に小姓として仕える土岐左兵衛佐朝直である。この日の詰番である書物奉行川口頼母が松平忠根からの御用呼び出しを受けて西丸へ出向き、土岐朝直と対談するよう指示されて会うこととなる。朝直の用件は、「朗詠などに鈔をさし候御書物」を差し出すようにとのことであつたが、すぐに「伊豆守」即ち西丸の御側衆巨勢伊豆守至信から、前年の本丸から西丸への引移りの際に書物方に預けた「鄂曲一巻」を差し出すように指示があつた。実はこれこそが土岐朝直のいう書物に該当するものであり、その事情を説明するために信遍が書状を認めたという経緯である。

なお、「郢曲」に関する記載のうち、「寅八月二日下ル」の「寅」は「丑」の誤りかと推測される。延享二年の八月初旬頃には、移徙を前にして奥から書物方への書籍の返却が夥しい数に上り、煩瑣を極める点検作業には信遍の知見が不可欠であった。八月三日条には、詰番深見新兵衛が松平肥前守忠根から「段々御書物下り候間、道筑申合請取候様ニ可致候」と、名指しで信遍の助力を乞うよう指示を受けたことが記される（拙稿⑨参照。「御引移之時分御預ケ成候郢曲一卷」とあるのだから、この時に書物方へもたらされたと考えるのが当然であり、十二年前の寅年（享保十九年、一七三四）を指すとは考えられないからである。もともと、『幕府書物方日記』の延享二年八月二日条には「郢曲」の書名はない。すべての書物の出納を厳密に記録するのはそもそも無理であったか、あるいは「八月二日」が誤認の産物なのか、いずれとも判断できないのが残念である。

△ 三月二十二日、冷泉為村、御暇乞として桜町天皇主催の禁裏当座御会に出席、二十七日に烏丸光栄とともに京を発し、江戸に下向する。（『扶桑残玉集』巻四「東行記」、『烏丸大納言光栄御御紀行』他）

寛保元年（一七四一）の為久薨去の後、長らく冷泉家当主との面晤の機会を得られなかった信遍達江戸冷泉派歌人にとって、後嗣の為村が師と仰ぐ烏丸光栄とともに家重の將軍継統の賀使として江戸

下向を果たした延享三年は、為久によって確立された江戸冷泉門の発展を一層強固にする重要な転機と映ったはずである。この年の為村・光栄下向に関わる記録を多くの諸書に見出すことができるのも、それだけ地下歌人達の関心が高かったからに他なるまい。すでに拙稿「冷泉家の歴史（二十二）為村（中）」（「しくれてい」七二号、二〇〇〇年四月二〇日）においてこの折の江戸下向の概略とその意義に触れているので、ここでは必要最小限の記述に留めるが、この旅程の詳細は、江戸での信遍との接点を明確にする点で必要な情報となるので、いささか検討を加えることとする。

下向記録は大まかにいって次のような項目から成る。

ア 延享三年三月二十二日開催の禁裏当座歌会

イ 光栄の東行記（復路を含む場合あり）

ウ 為村の東行記（復路を含む場合あり）

エ 為村の江戸滞在記事

オ 四月十九日「卯月郭公」題当座歌会

このうち、イについては、中川豊氏編『烏丸光栄関係資料集』（古典文庫、二〇〇二年三月二〇日）に、静嘉堂文庫蔵『烏丸大納言光栄御御紀行』（光栄自筆）の翻字が収められており、諸本の紹介や先行研究への言及などを含む周到な解説が付されているので、ここで改めて全編にわたって検討を加えることはしない。

以下、為村に関わる資料を中心に、調査済みの諸書の内容を概観するが、ア～オの種別を説明の基準としたい。

1 宮内庁書陵部蔵『扶桑残玉集』卷四所収「うち出の浜」（烏丸光栄）・「東行記」（冷泉為村）

「うち出の浜」はイを収める。三月二十七日の京出立から四月十五日に品川宿に立ち寄って迎えの使者と合流するまでの東海道經由の往路と、五月二日の板橋から十四日の京帰着までの中山道經由の復路の紀行。「東行記」はア、ウ、エ、オに該当し、ウは東海道經由の往路のみである。

2 東北大学附属図書館狩野文庫蔵『冷泉余瀝』坤所収「禁裡御暇和歌当座 光栄為村両卿御餞別」「烏丸光栄卿東行記 為村卿同時」「冷泉為村卿関東下向之詠歌」「為村卿江戸旅館当座和歌」

「禁裡御暇和歌当座 光栄為村両卿御餞別」はア。「烏丸光栄卿東行記 為村卿同時」はイで、往復の道の記。ただし、1には備わった五月二日分の記事がなく、三日朝に鴻巣を発つところから記述が始まる。「冷泉為村卿関東下向之詠歌」はウに該当し、わずかにエの江戸滞在中の和歌を含む。東海道經由の復路の詠もある。「為村卿江戸旅館当座和歌」はオ。

3 龍谷大学図書館蔵『東日記』

ウ（往復路）、エ、オを含む。当該記事の末尾に「五月十二日御上着御道記終」とあり、具体的な日程の記載がほとんどない為村の道の記としては珍しく、京帰着の日が明記される。

4 岡山大学附属図書館池田家文庫蔵『為村卿関東和歌』

ア、ウ（往路のみ）、エ、オから成る。末尾に、

御旅館にて帰京の時 冷泉三位為村

朝露のおきて出たつ旅まくらむすびなれにし名残をぞ思ふ
やがてとく都のつてに告やらむ海山やすくかへりつきぬと

の二首を掲げるのは珍しい。

5 刈谷市立刈谷図書館村上文庫蔵『蓬蘆雜抄』所収「東の紀行」ウ（往復路）、エ、オから成る。ただし、オは戸田氏房・巨勢至信・巨勢利啓・磯野政武の四首のみ。

6 宮内庁書陵部蔵『片玉集後集』卷九十八「冷泉宗匠家御詠」ウ（往路のみ）、エから成る。

7 宮内庁書陵部蔵『片玉集前集』卷三十六「和歌留」

エのうち、信遍・為村贈答歌二首（後述）のみが収められる。

8 国文学研究資料館蔵『冷泉為村卿詠作類聚』第一所収「延享三年関東下向」

ウ（往路）の一部、オの為村詠を収める。

9 川崎市市民ミュージアム池上家文書蔵『宗匠家御詠歌 一』『宗匠家御詠歌 三』

一の「延享三寅四月為村卿関東下向」にウ（往路）、エ、三に享保二十年以来の為久江戸下向記録を受け継ぐ形で「冷泉宰相為村卿関東下向旅中之詠歌」としてウ（往路・復路の一部）、エ、及びオの為村詠を収める。

三月二十七日の出發に先立って二十二日に催された禁裏当座御會

は、勅題、即ち桜町天皇の出題で、天皇の他、三条西実称、飛鳥井雅豊、冷泉為村、柳原光綱、烏丸光胤、庭田重熙、武者小路実岳、芝山重豊、烏丸光榮が出詠した。1の「東行記」の本文に従い、桜町天皇、為村、光榮の作を掲げる。

躑躅

つゝ、咲はやしの木陰くれなるにいまも紅葉をたくかとや見ん

松上藤

冷泉為村

けふさらに深き恵みの色そへてあかずみかきの松の藤浪

旅祝言

烏丸光榮

あふぐぞよ三たび出立東路の往来もやすくおさまれるよを

なお、2の「禁裡御暇和歌当座 光榮為村両卿御饒別」では、桜町天皇の作の結句が「たくかとぞみる」とあり、静嘉堂文庫蔵『御歌会集』巻二十五の「延享三年三月廿二日当座御会」では天皇詠の題が「躑躅紅」となっているなど、資料によって小異がある。

二十七日の出立以降の旅の実態は、『烏丸大納言光榮卿御紀行』に明らかである。拙稿「冷泉家の歴史(二十二) 為村(中)」で述べた通り、為村の記述は断片的で、旅程を辿るに十分な情報がない。

光榮の紀行に依り、為村との関係を窺うことのできる記述を取り上げておきたい。

京を出立した三月二十七日は草津泊、二十八日は坂の下、二十九日は桑名、四月朔日は熱田の宮、二日は赤坂、三日は新居、四日は掛川と順調に進んだが、五日は府中を目指すものの、安倍川の増水

に阻まれて鞆子に泊まり、翌六日も鞆子で足止めを余儀なくされる。その六日の記事の末尾を掲げる(『烏丸光榮関係資料集』一二四頁)。句読点・濁点を打ち直し、歌番号を省き、1の「うち出の浜」の本文に従って一部翻字を改めた(注記参照)。

(前略) 長き日をながめくらすに、右兵衛督のもとより、此あ
いだの詠吟なをしつけよとて、大津よりはじめ、このまりこま
での歌廿五首にそへて、

旅のやど長くし日の雨の中にます河水のおつるをぞまつ
かくいひをくられし、なさけふかくぞおほゆる。とりくおも
しらく思ひ給ふるよしをこたふ。

はれま、つ宿ぞいぶせきかち人のわたり絶ぬる雨の河辺に
旅のやどそぼふる雨のつれなくもなぐさむ千々の露のことの
は

はやく丙丁につけらるべきよしをぞいひをくりぬる。

注 『烏丸光榮関係資料集』は「つけくる」と翻字するが、「つけくる」では文脈が通らない。「つけらる」に光榮の為村に対する敬意を表わしたと見るべきで、「く」は「ら」を誤読したものと判断し、「うち出の浜」によって改める。

この記述により、ウに見える為村の道中詠が光榮の添削指導を経ていることがまず知られる。そして、為村の「旅のやど」歌は、安倍川の水量が落ちることを願うとともに、光榮の添削の墨が詠草の上に落ちることを冀う趣旨であり、その為村の気持ちを含んだ光榮

が「なさけふかくぞおほ」えたことも明らかとなる。光榮は為村の詠歌を「つれづれもなぐさむ千々の露の露のことは」にたとえて褒めるが、あくまでも非公式の返答として人目に触れるのを避けるつもりか、火中に投じるよう為村に言い送る。親子ほどに年の離れた光榮と為村の、互いを尊重し合う関係が印象的な一節である。

七日は安倍川を渡って江尻に宿り、八日は富士川の増水のため蒲原に足止めを余儀なくされる。九日も同様で、さすがに滞留に飽き飽きして光榮も為村も宿近くの海岸に出る。

侍従三位もつれづれなぐさめむと、このはまべに出てあみひかせて興ぜらる。程ちかければ、たちよりて此ほどのうさをぞかたらふ。〔『烏丸光榮関係資料集』一二六―一二七頁〕

蒲原の海岸で綱引を見物しながら語り合う光榮と為村の姿が何とも侘しげでおかしい。二人が蒲原を発って富士川を渡ることができたのは十一日であった。その日は沼津に泊まり、十二日は小田原、十三日は戸塚、十四日は川崎と宿りを重ねて、十五日は「けふも夜をこめてやどりをたち、品がはの駅にこしをとむれば、むかひにとて来り。」〔『烏丸光榮関係資料集』一三一頁〕とあって、恐らくは幕府側の使者に出迎えられて江戸入りを果たしたと思われるが、これ以降の往路の記事はない。

○ 四月八日、深見新兵衛へ書状を遣す。〔御書物方日記〕第三十冊〕

成島道筑方より一封差越候に付、致披見候へば、新兵衛方え之状に候。依之、則黒鋏出被に而、新兵衛方へ為持遣し候。

この日の詰番は小田切治大夫であった。黒鋏者が出払っていたが、小田切の指示で書状は無事新兵衛に届けられたらしい。深見新兵衛に対し、どのような用件で書状を差し出したのかは、この時点では不明であるが、四月十一日の記事によって明らかとなる。

○ 四月十一日、加賀前田家に献せられた「飲膳正要」についての八日付の調査報告と添え状が書物奉行深見新兵衛にもたらされる。〔御書物方日記〕第三十冊〕

飲膳正要、松平加賀守殿写献之、年比相知不申候に付、先達而土岐左兵衛佐え、道筑ヲ以、承度由申達候之処、当八日相知候由に而、左之通書付一通、道筑より手紙相添、御蔵迄被越候間、今日御目録下番に年号書加申候。近日御小納戸御目録に書加可申候。

道筑より差越候書付、左之通。

飲膳正要

元文二年巳正月十六日、松平加賀守え書写差上候様に被仰付、同三月十三日献之。

右之書付、并道筑手紙一包に致し、右号に入置之。

「松平加賀守」は、利家から数えて六代目の前田家当主吉徳であ

る。享保八年六月十五日に若狭守から加賀守に改める（寛政重修諸家譜」巻一一三二）。末尾に添えられた書付によれば、元文二年正月十六日に、吉徳に「飲膳正要」の写本を献じるよう書物方に命が下り、三月十三日に献じたという。その経緯を土岐左兵衛佐に問い合わせ、その回答を得るにあたり、いずれも信遍が関与したことを示す内容である。

ちなみに、『大日本近世史料 幕府書物方日記』十三の元文二年正月十六日条・三月十三日条のいずれにも、当該記事は見当たらないかった。

○ 四月十五日以降十九日までの間に、冷泉為村と面会し、為村に「和歌の浦や」歌を贈り、為村より「三代かけて」歌を返される。

（『扶桑残玉集』巻四「東行記」他）

四月十五日に品川で出迎えられ、十九日に信遍達と当座歌会を催すまで、為村が江戸でどのような日々を送ったかは判然としない。

石野政雄氏「近世堂上派随想」（三古会編『近世の学芸―史伝と考證―』（八木書店、一九七六年三月一五日）所収）にも、

九代將軍家重継統の賀使として、烏丸光榮・冷泉為村が江戸に下向した。將軍の引見のあったのは、延享三年四月廿日であった。道筑はこの日にややさきだつて、はじめて新宗匠為村卿と対面した。（三三二頁）

とあるのみで、日付を特定するに足る情報は伝わらないらしい。念のため、三月二十二日の為村・光榮禁裏御会参加の条で揭示した延享三年下向記録のうち、エ「為村の江戸滞在記事」に該当する各書の記述を確認してみる。なお、2の記事により、將軍家重からの問いに答える形で為村が富士賞翫詠を奉呈した可能性があるので、それも含めて掲げることとする。

1 「東行記」

富士賞翫詠

名に高き山はふじのね消ぬがうへに雪もいく世々降重ぬらん
夏かけて降かのこるか時しらぬ雪を高ねのふじの芝山

箱根

ふもとより雨ふり出て箱根山立おほふ雲の奥ぞをぐらき

成島道筑初御対面の節、詠進和歌

和歌の浦やみるめをかるも蛸衣重ねし世々の恵とぞしる

即時御かへし

三よかけてみるめをかるもなみならぬ契とぞ思ふわかか浦人

2 「冷泉為村卿関東下向之詠歌」

於江府、公方より詠歌御たづねにつき、書上られけるうた
名に高き山はふじのねけぬがうへの雪もいく世々ふりかさぬらん

3 『東日記』

富士賞翫の詠

名にたかき山はふじのねけぬが上の雪もいく世々降重ぬらむ
夏かけてふるか残るは時しらぬゆきを高根のふじの芝山

箱根

麓より雨ふり出て箱根山立おほふ雲のおくぞおぐらき

於江戸、成島道筑はじめて御対面の折、詠進

わかの浦やみるめをかるもあま衣重ねし世々のめぐみともしる
御返し

三代かけてみるめをかるもなみならぬいろとぞ思ふわかの浦人

（四月十九日当座、省略）

なでしこを送りし返しに

為村卿

手にとりて見るに糸ならぬ色も猶折人からの大和なでしこ

巨勢和州御旅館をとぶらひ給ふ折、ほと、ぎす一こえおとづ

れければ

ほと、ぎす慰めよとの一声はこ、を旅ともおもわでぞきく

御旅館にのこし給ふ

朝露にわきて出行たび枕むすび馴にし名残をぞとふ

かへりなば都のつとに告こさん海山やすくけふは越ぬと

4 『為村卿関東和歌』

富士

名に高き山はふじの根消ぬがうへの雪もいく世々降重ぬらむ
夏かけて降か残るか時しらぬ雪を高根のふじの芝山

箱根

麓より雨降出て箱根山たちおほふ雲の奥ぞをぐらき

武州にて成島道筑初て御対面の節の和歌

和歌の浦やみるめをかるも蟹衣重し世々の恵とぞしる

即時御返し

冷泉三位為村卿

三よかけてみるめをかるもなみならぬ契りとぞ思ふ和歌のうら

人

（中略）

御旅館にて帰京の時

冷泉三位為村

朝露のおきて出たつ旅まくらむすびなれにし名残をぞ思ふ

やがてとく都のつてに告やらむ海山やすくかへりつきぬと

5 「東の紀行」

遙望筑波山（梅上山光明寺より）眺望——以上割書（引用者注）

筑波根はみる程遠きよそめにも夫とやしるく葉山しげ山

御殿中にてはじめて御対顔の時 戸田淡路守氏房

心にもかかずは何とあふひ草露の情の深きをぞしる

御返し

かけそひしけふの葵のことはは露の情の猶増りけり

御旅館にて

巨勢大和守利啓

旅衣たちかへるとも時鳥とひし初音をわすれずもがな

御返し

ほと、ぎすなぐさめてけり初声に爰を旅とは思はでぞ聞

橘の作り枝を奉るとて

高井長門守真政

言の葉の花さへ実さへ橘の栄行かけを千代も頼まん

御返し

かけ頼む人も幾千代立花の実さへ花さへとはに見ん

鳴海道筑信遍

和歌の浦やみるめをかるも海士衣かさねし代々の恵をぞしる

御返し

三代かけてみるめをかるも波ならん契りとぞ思ふわかか浦人

〔御会の外に詠出 卯月郭公〕四首省略

富士賞翫の詠

名に高き山は富士のねけぬが上に雪も幾世と降かはらむ

夏かけてふるか残るか時しらぬ雪を高根の富士の芝山

6 「冷泉宗匠家御詠」

遙望筑波山

つくばねはみるほどとをきよそめにもそれとわかる、は山しげ

山

為村卿富士御賞翫之御詠

名にたかき山はふじのねけぬがうへに雪もいくよ、降かさぬら

ん

夏かけてふるかか時しらぬ雪を高ねのふじのしば山

(中略)

為村卿江府御発駕の時、御門下へとて

朝露のをきて出たつ旅衣むすびなれにし名残をぞおもふ

やがてとく都のつてに告こさむ海山やすくかへりつきぬと

7 「和歌留」

為村卿へ信遍奉れる歌

和歌の浦やみるめをかるも蟹衣かさねしよ、の恵とぞしる

御返し

三よかけてみるめをかるもなみならぬ契とぞおもふわかか浦人

9 「延享三寅四月為村卿関東下向」

富士賞翫之詠

名に高き山はふじのねけぬがうへに雪も幾よ、ふり重ぬらむ

夏かけてふるか残るか時しらぬ雪をたかねのふじのしば山

(白菅より原・吉原あたりまでの道中詠、省略)

同年御下向の節申奉る

信遍

和歌の浦やみるめをかるもあま衣かさねしよ、の恵とぞしる

御返し

為村卿

三よかけてみるめをかるもなみならぬ契とぞ思ふわかか浦人

遙望筑波山

筑波根は見るほど遠きよそめにも夫とわかる、葉山しげ山

旅行の御詠は別巻に記しぬ

〔冷泉宰相為村卿関東下向旅中之詠歌〕

(草津より箱根までの道中詠、省略)

四月十九日御旅館御当座

卯月郭公

東路の山ほと、ぎすみやこにはまつらん声をあまたにぞ聞

折しも撫子をまいらせける人あり。又御当座

な なぞへてもみん色ぞなき幾千種さす花がめの撫子の花

信遍

て 手にとりてみるもえならぬ色も猶折人からのなでしこの花

御詠歌也。此外之人々のうたはこゝにもらしぬ。

御帰京之日、御旅館にさしをかる

あさ露のおきて出たつ旅枕むすびなれにし名残をぞ思

やがてとくみやこのつてに告こさん海山やすく帰りつきぬと

帰洛旅人

門弟中

河崎にて

みやこちにかへりつくともわすれめや此河崎の里のやすらひ

まず気づかされるのは、4を除いて「富士賞翫」二首が他の道中詠とは別扱いになっていることである。2にいう「公方より詠歌御たづねにつき、書上られけるうた」との位置付けが正しければ、家重に詠歌の要諦を説明した素材として特記されるのも当然かもしれないが、その確たる証拠は見出せない。

次に、3や5の記述により、信遍の他、主な冷泉派歌人達が為村との面会の機会を得ていたことがわかる。「遙望筑波山」歌は、5

の歌題下の割書により、證道が住持を勤めた西久保の梅上山光明寺で詠まれたものと知られるから、為村が證道の誘いを受けて同寺で時を過ごし、證道にゆかりある筑波山を遠望したのは間違いない（證道に関しては、拙稿⑥の享保二十年冬の「武蔵野地名考並記図引」撰文条に考証を展開している。ご参照頂きたい）。また、5で「御殿中にてはじめて御対顔」を果たしたとされる氏房・利啓・真政に続いて信遍の名が挙がるのは、譜代大名や旗本達と為村の面会の時と場が、ある日の江戸城中に用意されたことを意味するのである。しかし、これも特定には至らない。

そして、信遍が「和歌の浦や」歌を為村に贈り、為村が「三代かけて」歌を返した旨の記事は、概ね四月十九日の当座歌会よりも前に置かれるのが通例である。「惇信院殿御実紀」卷三によれば、十九日に「参向の公卿府に入り、二十二日に「公卿引見」が行われている（『新訂増補国史大系 徳川実紀』第九篇三八三頁）。記事の順番が時間の前後を反映しているのであれば、遅くとも十九日の歌会開始前までには江戸の門人達との面会は済ませていたと見るのが自然であろうから、十五日以降十九日までと幅を持たせて立項した。

なお、信遍贈歌と為村返歌の表現には小異があるが、信遍歌・為村歌とも1・4・7・9の形が正しい。3と5の書写者は和歌の修辭の理解が甚だ不十分といわざるを得ないが、江戸冷泉門の中核から発信された情報の受け取り手の学力としては、ある程度普遍的なものとして許容する他はない。

さらにいえば、十九日の当座歌会の後にも巨勢利啓や信遍が為村との面会の機会を持ったことを窺わせる資料もある。3では、ある人物が撫子を贈ったのに対し、為村が「手にとりて」歌で応えているし、「巨勢和州御旅館をとぶらひ給ふ折」に鳴いたほととぎすを為村が「ほととぎす」歌で賞美する。9には、「折しも撫子をまいらせける人あり。又御当座」の詞書で、為村の「手にとりて」歌とともに信遍の「なぞへても」歌が掲げられるので、3と重ね合わせれば為村に撫子を贈ったのは信遍と見なすことができる。9は信遍に門人として親炙する池上幸政（のち幸豊）の記録だから、信遍から直接入手した情報かもしれない、信憑性は高い。十九日以降の事績として立項する必要がある。

残念なのは、以上述べた江戸冷泉門との交流の日程がどうしても確定できないことである。

○ 四月十九日、池上幸政の冷泉家入門を仲介する。また、同日、西久保の大養寺塔頭寿向院において催された当座歌会に出席する。題「卯月郭公」。（冷泉家門人帳、『京進書札留』一、『扶桑残玉集』巻四「東行記」他）

池上幸政の為村への紹介と当座歌会出席のどちらが先だったかはわからない。当座歌会に相応の時間を要し、その後の懇親が盛会であったと仮定すれば、歌会開催の前に事務的な処理を済ませたと推

測するのも妥当なことと思われるので、ひとまず入門仲介を先に立てた。

幸政の入門の日時を確定する第一の資料は、冷泉家時雨亭文庫所蔵の為村筆「冷泉家門人帳」（仮称）である。これまでわずかに見開き二丁分しか公開されていない（詳細は拙稿「歌の家はなぜ続いたか」へ浅田徹氏他編『和歌をひらく』第一巻、岩波書店、二〇〇五年一〇月二〇日）参照が、このうち延享二年から三年にかけての一丁は、冷泉家時雨亭文庫・NHK編『京の雅・和歌のこころ 冷泉家の至宝展』図録（NHK・NHKプロモーション、一九九七年八月）を始めとして幾度か写真が公開され、そこに記載された事項に限られるものの、どのような身分の人物が、いつ、誰の仲介によって入門したかをつぶさに知り得る稀有の資料となった。ここに信遍や幸政の名が見られるのは全くの偶然である。いつか全丁が公開されることを期待しつつ、限られた情報から幸政入門前後の状況を再構築してみる。

「冷泉家門人帳」には次のような記載があった。

池上太郎右衛門源幸政 明和五改幸豊 同月十九日入 武州大
師河原住 道筑拳（『京の雅・和歌のこころ 冷泉家の至宝展』
図録一九七頁）

これより四項前の「高津因幡守藤原康遠」の上覧に「同三」とあり、これが延享三年を意味する。また、「同月」は二項前の「四月十七日」を受けるので、幸政が「道筑拳」によって延享三年四月

十九日に入門を果たしたのは間違いない事実となる。

一方、川崎市市民ミュージアム池上家文書蔵『京進書札留』は、幸政が入門以降に冷泉家に出した書状の手控えであり、その一の冒頭には次のようにある。通行の字体に改め、適宜句読点・濁点等を補い、注記を施す。なお、拙稿中には、本稿で省略する図も含めて翻字済みであり、拙著『近世冷泉派歌壇の研究』一五八―一六〇頁に一部再録するにあたって校正漏れを修訂した。『近世冷泉派歌壇の研究』を合わせてご覧いただきたい。

延享三年寅四月、冷泉家御下向之節、御門下入之儀、成島貴氏を以相願候所、御許容之上、於御旅館、同月廿日御目見被仰付候。尤其節関柳陰披露、御供之雑掌安藤喜内・中川瀬平 中川清基男^①、御礼式詠草柳陰ヲ以差上候。

目録、左之通

御肴代 金三百疋 小奉書二枚 三ツ折如図 包のし 台にすへ

御肴代 金百疋 のり入二枚 付のし 尤へぎにのせ 兩人へ同様^②

一 毎年年始・八朔、金貳百疋づ、雑掌衆百疋づ、暑寒御伺之節は何成共見合。

一 詠草上ゲ候事、毎月又は隔月にも。

同月^③廿九日江戸御発駕、於川崎駅御昼休、御膳朝岡帯刀より上ル。我等儀、御肴代金百疋、雑掌衆へ銀壹匁づ、上ル。

御小休迄御供致し、花ヲ指上申候。

江戸御旅館に残し被置候御詠

あさ露のおきて出たつ旅まくらむすびなれにし名残をぞ思ふやがてとくみやこのつてに告こさむ海山やすくかへりつきぬと

帰洛旅人

門弟中

川崎之御休にて

みやこぢにかへりつくともわすれめやこの河崎の里のやすら

ひ

注(1) 「中川清基男」は小書き。

(2) 原文には「目録」二枚の図が上下に描かれるが、省略する。

(3) 原文では「同年」の「年」を見消にし、「月」に改める。この二つの記述を重ねれば、次のような経緯がおのずと見えてくる。まず四月十九日に信遍が幸政の入門を為村に申請し、為村が許可を出す。翌二十日に為村の宿所を訪問し「御目見」に与るよう指示を受け、当日は公儀御用達商人で冷泉門の関尚之柳陰の立会いのもと、正式に入門の「御礼式」が執り行われる。毎年の謝礼の金額や詠草提出の頻度など、門人として守るべき取り決めも交わされる。信遍はあくまでも仲介したのみで、入門の儀式に立ち会うことはなかつたようである。恐らく身分の差故であろう。

為村は四月二十九日に江戸を發し、東海道を西に向かうが、幸政は川崎宿で待ち受けて昼休憩の接待をし、「御肴代」を為村と雑掌衆に獻呈する。富豪ならではのもてなしぶりに、入門を果たした幸政の喜びを十分に看取できる。

信遍の仲介によって無事幸政は入門を果たしたが、十九日に行われた当座歌会には当然ながら関与できなかった。信遍達古参の門人を中心に、これまで師事してきた門人にもみ開かれた場なのだ。

当日の会の性格と参加者については、先に触れた石野氏稿に概略が述べられる。石野氏の依拠した「関東道記 光榮卿為村卿」の書誌や所在等が明示されず、和歌も省略されるなど、この催しの説明としてはもう一歩踏み込んだ記述が望まれるが、近世文学史においてこの当座歌会の意義を論じた最初の業績として、今後も参照されるべき論である。本稿では、オの全貌を記録する1〜4のうち、1を底本として前書・和歌・作者名を掲げ、和歌・作者名については、2〜4、及び石野氏の記述との異同を注記する形をとる。なお、本歌会記録では他を圧する善本はなく、いずれも誤写を免れない伝本ばかりである。底本にも明らかな誤写が見られるが、あえてそのまま翻字し、留意点は注記に委ねる。

まずは、会の趣旨を説明する前書きから。2以外の3点に備わるが、字句には若干の出入りがある。

御門弟中願にて、卯月十九日、於御旅館御当座被催、其節故大納言為久卿御懷紙所持の輩これあり候は、持参あるべきよしに

て、桑村佳孝持参、右の御懷紙をかけられ、香花を備られ、此御懷紙を今日の宗匠と遊ばさるべきよしにて、為村卿御拝礼あり。列座の衆中各拝礼いたされ、御当座の事、再往御辞退被成候へども、達て被相願により、かくのごとし。御謙退感心有余。

御懷紙 詠寄名所述懷和歌 右衛門督為久

末かけて猶こそ頼め春日山みよのこと葉の松の藤なみ

為村は関東門人達の切なる要望を踏まえ、父為久の「末かけて」歌自筆懷紙を佳孝から提供されて、何度も辞退して見せつつ、為久詠を宗匠として当座歌会を催すこととした。先代からの門人を前に、「御謙退」の態度を形に表す為村の姿は「感心有余」と好ましく映ったらしい。

続いて当座歌会の和歌と作者名が列挙される。便宜上通し番号を付した。

卯月十九日御当座、芝西久保大養寺塔頭寿向院⁽¹⁾にて

卯月郭公 為村卿

①東路の山ほと、ぎす都には⁽²⁾待らん声をあまたにぞきく

戸田淡路守氏房

②郭公旅のやどりをなぐさめて⁽³⁾五月こぬまもあまたにぞ⁽⁴⁾なく

巨勢伊豆守至信

③東路はまつもまたず⁽⁵⁾も卯花のやどにかたらふ山ほと、ぎす

磯野丹波守政武

④行かへり旅ねかたらへ時鳥をのがさつきもちかきまくらに⁽⁶⁾

巨勢大和守利啓

⑤めづらしき旅のやどりの郭公五月をまたず⁽⁷⁾あまたとふ声⁽⁸⁾

高井長門守真政

⑥まれに來し人⁽⁹⁾にきけとや時鳥卯月の空におちかへりなく

成島道筑信通

⑦郭公旅ねとふとや卯花の垣ね夜ぶかき月になく⁽¹⁰⁾らん

鎌倉別当大庭昌長

⑧稀にあふけふを時とや郭公をのが五月もまたで鳴らん

光明寺證道⁽¹¹⁾

⑨まれ人をまちえて聞ば卯花のうきをわする、山ほと、ぎす

梅窓院俊阿

⑩ほと、ぎす五月をちかみふる雨の夕の空にもらす一声

栗栖真悦

⑪めづらしと聞人からや時鳥卯月の空に音をも忍ばぬ

湯川栄輪⁽¹²⁾⑫宮人をなれも待らし⁽¹³⁾卯月よりことしはあまた鳴郭公

矢代久意

⑬卯花の咲る垣ね⁽¹⁴⁾の郭公まちし日数を重ねてぞきく⁽¹⁵⁾

田島宗栄

⑭里なべて⁽¹⁶⁾声なをしみそ郭公をのが五月も程近きころ⁽¹⁷⁾前田松策⁽¹⁸⁾⑮卯花のやどりとふやと⁽¹⁹⁾時鳥をのが五月もまたでなくらん⁽²⁰⁾栗原友右衛門正雅⁽²¹⁾⑯卯花の盛過さで⁽²²⁾ほと、ぎすけふめづらしき初音をぞきく⁽²³⁾

森川主馬章信

⑰東路の旅ねもあまた夜をへつ、卯月をかけて聞郭公⁽²⁴⁾北平馬惟賢⁽²⁵⁾

⑱都人來るをやまちし時鳥卯月の空にかたらひてなく

中河瀬平忍清⁽²⁶⁾⑲東路の卯月の空の郭公まれに來て聞声はめづらし⁽²⁷⁾

安藤喜内繼典

⑳めづらしな⁽²⁸⁾をのが五月もまたで鳴山ほと、ぎす軒ばとふ声⁽²⁹⁾関柳陰⁽³⁰⁾㉑東路に聞ぞ馴ぬる郭公みやこの卯月いか、鳴⁽³¹⁾らん⁽³²⁾

桑村三右衛門佳孝

㉒こ、ろある人にきけとや時鳥五月をまたぬ東路の声⁽³³⁾

蝦原三郎左衛門喜寛

㉓なげやなげ⁽³⁴⁾卯月待えて言のはもしげる青葉の山ほと、ぎす⁽³⁵⁾枝助七安路⁽³⁶⁾㉔郭公まれなる折にあふひ草かけてまたれし声なおしみそ⁽³⁷⁾

倉田勘左衛門豊之

㉕卯花の垣ねは雪の夕まぐれふり出てなく山ほと、ぎす⁽³⁸⁾田沢源太郎義景⁽³⁹⁾㉖卯花の咲初しより時鳥なれも時しる音をや鳴らん⁽⁴⁰⁾

前人妻

②7 五月待ならひありとも郭公まづ卯花の陰に鳴らん⁽⁴⁾
注 (1) 寿向院―2は場の明示なし、3「寿光院」。

- (2) 都には―2「都にも」。
- (3) なぐさめて―3「尋来て」。
- (4) あまたにぞ―2「あまたにや」。
- (5) またず―3「またぬ」。
- (6) 2は政武歌を五首目に置く。
- (7) 五月をまたず―2「五月もまたず」、3「五月もまたず」。
- (8) 2は利啓歌を四首目に置く。
- (9) 人―4「君」。
- (10) なく―3「ふく」。
- (11) 證道―3「際道」。
- (12) 栄輪―2「栄輪」、石野氏「栄倫」。
- (13) 待らし―2「めづらし」。
- (14) 垣ね―2「籬」。
- (15) 2は久意歌を十四首目に置く。
- (16) 里なべて―2「里なれて」。
- (17) 2は宗栄歌を十三首目に置く。
- (18) 松策―2・3・4・石野氏「春策」。
- (19) とふやと―2・3「とふとや」。

- (20) 2は春策歌を二十一首目に置く。
- (21) 正雅―2「正権」、3「正」、4・石野氏「正推」。
- (22) 過さで―2「過ぎて」。
- (23) 2は正権歌を二十首目に置く。
- (24) 2は章信歌を十五首目に置く。
- (25) 惟賢―2「雅賢」。
- (26) 忍清―2・4・石野氏「恩清」。
- (27) 2は恩清歌を十七首目に置く。
- (28) めづらしな―3「めづらしき」。
- (29) 2・3・4いずれもこの歌を柳陰作とする。2は二十二首目、3・4は二十一首目に置く。
- (30) 柳陰―2・石野氏「柳隠」。
- (31) 鳴―3「なる」。
- (32) 2・3・4いずれもこの歌を継典作とする。2は十九首目、3・4は二十首目に置く。
- (33) 2は佳孝歌を二十三首目に置く。
- (34) なげやなけ―3「なげやるな」。
- (35) 2は喜寛歌を二十四首目に置く。
- (36) 枝助七安路―2「安路」、石野氏「牧助七安路」。
- (37) 2は安路歌を二十五首目に置く。
- (38) 2は豊之歌を二十六首目に置く。
- (39) 義景―2・石野氏「義章」。

〔40〕 2は義章歌を十六首目に置く。

〔41〕 鳴らん―3「なかなん」。

異同のうちもっとも重要なのは、誰がどの歌を詠じたのかという問題、及び作者名そのものとなる。1が②を安藤喜内継典作とし、②を関柳陰作とするのは、もっとも重大な誤りと見なさざるを得ない。先に引用した『京進書札留』の記事を見れば明らかだが、安藤喜内と中河瀬平は為村に随行した冷泉家の雑掌である。その安藤の作として②と②のいずれがふさわしいかといえは、江戸でようやく聞き馴れつつあるほととぎすの声から都に思いを馳せる②であろう。他の三本がすべて逆に認定するのは当然であり、1は歌の順番に無頓着な2よりも決定的な欠陥を有する。

次に作者名。1の順番に沿って検討を加える。⑨の「證道」は、先に触れた拙稿⑥の考証で明らかであるが、「證道」で間違いない。

⑫の「栄輪」「栄倫」「栄倫」の問題は、宝暦六年（一七五六）の岡田忠篤主催「千首和歌」（慶応義塾大学図書館・天理図書館蔵）の作者一覧に「源直躬 西殿奥 湯川栄倫」とあることで解決する。

⑮の「前田松策」は、「冷泉家門人帳」に「前田春策子計」として立項されるから「春策」が正しい。なぜ1が「春」を「松」と誤ったか、理解に苦しむ。⑯の「栗原友右衛門」、⑱の「北平馬」の名は、他資料による裏付けが得られず不明。⑲の「中河瀬平」の名は、大阪市立大学附属図書館森文庫蔵『冷泉門人』に、「家士」の一人として「中河三之允 忍清」が立項される。正しくは⑲の「関柳陰」は、

「柳陰」「柳隱」の両方を通用していたようだ。⑲の「枝助七安路」については、『片玉集後集』巻七十九「冷泉家御褒詞詠藻上」に「安路 枝権兵衛」の作が見える。⑲の「田沢源太郎」の名は、拙稿⑥で触れたように「義章」が正しいが、「よしあきら」の読みで共通する「義景」をも通用した可能性は残る。

この日、為久の詠草掛軸を飾り、為村を問近に仰いで行われた当座歌会が、関東の冷泉門人に深い感銘を与えたのは間違いない。参加者が新たな門人拡大に寄与するところも大きかった。その動きの中心には信遍が存在する。

（未完）

〔補記〕 本稿は、令和二年度科学研究費補助金基盤研究（C）「成島信遍研究―幕臣文人の事績を通して見る近世中期江戸文壇の特徴―」による研究成果の一部である。

A Chronological Record of Narushima Nobuyuki's Career (21)

Keiichi KUBOTA

In my previous paper, I serially recorded Narushima Nobuyuki's career from 1689 to 1745. This paper presents a detailed account of the articles provided to him in the first half of 1746.

In April, Reizei Tamemura, a master of waka, came to Edo as an envoy to celebrate the shogunate of Tokugawa Ieshige. Nobuyuki welcomed Tamemura, as a main pupil of the world of Reizei waka in Edo and took part in a gathering of waka on April 19.

As usual, he served as mediator between dignitaries from Tokugawa Yoshimune's shogunate and the librarians of Momijiyama Library.

